

## 1. プロジェクトの紹介 グローバル化時代の境域社会における民族再生のダイナミクスー東南アジア・東アジアの地域間比較ー

著者	長津 一史, 井出 弘毅, 石井 正子, 植野 弘子, 後藤 武秀, 松本 誠一, 宮下 良子, 山本 須美子
雑誌名	アジア文化研究所研究年報
号	51
ページ	314(123)-305(132)
発行年	2017-02-28
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00008483/">http://id.nii.ac.jp/1060/00008483/</a>

1. プロジェクトの紹介

# グローバル化時代の境域社会における 民族再編のダイナミクス

——東南アジア・東アジアの地域間比較——

長 津 一 史<sup>\*</sup>（研究代表者）

カテゴリー 井上円了記念助成金共同研究  
研究期間 2014年度～2016年度  
研究分担者 井出弘毅（アジア文化研究所客員研究員）  
石井正子（立教大学異文化コミュニケーション学部教授）  
植野弘子（社会学部教授）  
後藤武秀（法学部教授）  
松本誠一（社会学部教授）  
宮下良子（アジア文化研究所客員研究員）  
山本須美子（社会学部教授）

**研究連携** 本研究は、東洋大学アジア文化研究所研究班「トランスナショナリティ研究」（代表：松本誠一）の活動の一環をなす。また、長津一史を代表者とする科学研究費補助金・基盤B（海外）「東南アジア島嶼部における国境管理レジームと境域社会の変容—地域間比較の視点から」と連携しておこなわれている。本年度はプロジェクトの最終年度になる。

## 調査活動の概略

2015年11月～2016年10月の主な研究活動の概略は次のとおりである。

### (1) タイ・カンボジア国境域の社会動態調査

調査者：長津一史

期 間：2015年12月19日～23日

出張先：タイ・アランヤプラテートとカンボジア・ポイペト

概 要：

本調査は、カンボジア・ポイペトとの国境域に形成されたタイ・アランヤプラテートの巨大古着市場を観察し、古着交易のグローバルネットワークの一端を明らかにすることを目的とした。以下

---

\* 東洋大学アジア文化研究所所員：Asian Cultures Research Institute, Toyo University, 5-28-20, Hakusan, Bunkyo, Tokyo, 112-8606 / nagatsu@toyo.jp

はその観察を中心とする調査のメモ書きである。

12月21日、バンコクでの調査打合せの後、バンコクからアランヤプラテートへ陸路で移動した。平らなデルタ地帯を移動。車窓からは家並みが途絶えることがなかった。プラーチンブリー県に入ってからはやや農村的な景観がみられるようになった。このあたりでは、サトウキビ、チーク、キャッサバが主な生産物である。乾期のため乾燥していた。季節柄か、水田の緑はあまりみられなかった。アランヤプラテートは土埃が舞う国境の町である。国境の市場はメインの市街地からやや離れている。市場は国境貿易に特化している。人、車の往来は激しいが、通過点にすぎないためか、食事や宿泊の施設は少ない。周囲を歩いているのは、主に入国するカンボジア人と思われた。夕刻には、その日の仕事を終えた大量のカンボジア人が、細い通路を歩いてイミグレーションに向かっていた。その手前の路上では女性たちが揚げた豆や昆虫を売っていた。町の主要産業は、地区の大半を占める巨大な古着市場である。この日は夕刻着のため、市場労働者のための生鮮市場のみを観察した。

12月22日、タイ・カンボジア間の越境移動に関する聞き取り調査をおこなった。アランヤプラテートとカンボジア領内ポイペトの間には、緩衝地帯のような一角がある。ポイペトの古着仲買人から聞き取りによれば、古着はブノンペンから運ばれる。輸出元は日本や韓国、欧米などである。しかしなぜアランヤプラテートの税関を通るのかは不明であった。古着をはじめとする商品は密貿易されているのではなく、きちんと通関していた。この国境の主要交易商品は古着である。大八車で大量の古着を運ぶ人びとを多数目にした。

後、アランヤプラテートの古着市場をひととおり観察する。東京ドームが数個入るくらいの広さである。あまりに広いので、客はバイクや乗合カートを利用する。種類別の店のブロックはもちろん、アイロンがけやミシンがけを専門にする店のブロックもあった。労働者の多数はカンボジア人。この市場はもとはカンボジア難民のキャンプであった。12月23日、陸路でバンコクに戻った。

## (2) インドネシア・東ジャワ州における水産資源の利用と流通のグローバル化に関する調査

調査者：長津一史

期 間：2016年2月29日～3月7日

出張先：インドネシア・東ジャワ州（他にシンガポール・マカッサルも訪問）

概 要：

本調査は、インドネシア・東ジャワ州シドアルジョの粗放型エビ養殖池を観察し、生産者・流通業者との聞き取りに基づいて、国際商品としてのエビの生産と流通について知ることを目的とした。以下はその観察を中心とする調査のメモ書きである。

2月29日～3月1日、シンガポール国立図書館において東南アジアの水産資源利用の変化について資料調査をおこなった。3月2日東ジャワ州シドアルジョ県において、エビ・ミルクフィッシュの粗放養殖池を所有するジャワ人漁民を対象に海産資源利用・土地利用・相続・生業変遷を主なテーマとするライフヒストリーの聞き取りをおこなった。3月2日同県においてエビ養殖池を訪問、池所有者・管理人から海産資源利用とそのネットワークに関する聞き取りをおこなった。概要は下記の通り。

シドアルジョ県は、ブランタス川の分流であるマス川とポロン川の2つの河川に挟まれたデルタ地帯である。県の東側に広がるマドゥラ海に、これらの河川は注ぐ。マドゥラ海が満潮になると海水が流れ込み、干潮になると川の水が海に流れ出す同県の沿岸部には、マングローブ林が生い茂る。ここに、山手線内側面積の約2.5倍のタンバック（tambak）と呼ばれる汽水養殖池が掘られている。付近の川を利用して海水と淡水を取り込み、海から稚エビの入ってくるミルクフィッシュ、エビ、

カニを育てる目的で、ジャワ島のタンバックは1400年ごろから存在している。1970年代半ば以降、タンバックではミルクフィッシュとともにウシエビ（ブラックタイガー）種のエビが意図的に育てられるようになった。海からタンバックへ偶然に流れ込むウシエビの稚エビを育てればよい稼ぎになると知った人びとが、ハッチェリー（人工ふ化施設）からその稚エビを購入して、タンバックに放流する方式で養殖をはじめた。シドアルジョ県のタンバック養殖は、台湾に端を発しインドネシアを含むアジア各国で急速な広がりを見せた集約型の養殖とは異なる。狭い池にエアレーターで酸素を供給しながら、人工飼料や抗生物質を用いて大量の稚エビを高密度で養殖するのが集約型の養殖である。他方、シドアルジョ県でおこなわれているのは、人工飼料や抗生物質に頼らずに、プランクトンやミミズなどの天然餌を利用した粗放型の養殖である。低密度養殖のため集約型に比べれば生産性は低い、環境負荷が小さく、持続性が高い。

3月4～5日国立ハサスディン大学法学部学部長Farida Pattingi教授を訪問、海民の日常生活用品の調査にかかる成果報告をおこなった。あわせて、東インドネシア海域における消費動向に関する今後の調査について意見を伺った。シンガポール経由で帰国。

### (3) オーストラリア学会参加／和歌山県太地町・串本町の海外出稼ぎ史等に関する調査

調査者：長津一史

期 間：2016年6月11日～6月15日

出張先：和歌山県和歌山市、東牟婁郡太地町・串本町

概 要：

6月11日、和歌山市内にてチャールズ・ダーウィン大学准教授のナターシャ・ステージー（Natasha Stacey）氏と落ち合い、翌日の研究報告に関する打合せをおこなった。12日和歌山大学観光学部にてオーストラリア学会参加。鎌田真弓名古屋商科大学教授が組織したパネル「『境界』を越える人びと：豪北部海域における人の移動と境界管理」において、ナターシャ氏の報告“Transboundary small-scale fisheries in the Timor and Arafura Seas region of Northern Australia”に対するコメントータをつとめた。後、山田勇京都大学名誉教授と和歌山駅で合流し、ナターシャ氏とともに紀伊勝浦へ移動した。

13日、紀伊勝浦漁港においてマグロの水揚げを観察した。同港は、かつては日本最大のマグロ漁獲量をほこっていたが、現在では漁獲量は減少傾向にある。後、太地町に移動。太地町くじら博物館を見学した。ついで太地町歴史資料室学芸員・ニューベッドフォード捕鯨博物館顧問学芸員の櫻井敬人氏から、捕鯨をはじめとする太地町の漁業史、オーストラリア、カナダ、北米等への町民の海外移民史に関する講習を受けた。講習後、町内の寄子路地区や新屋敷地区など、捕鯨従事者や海外出稼ぎ者が居住する地区を歩いた。これらの地区には、捕鯨の役割にちなんだ名字を持つ人が多くみられる。また、第二次世界大戦前にアメリカやオーストラリアに出稼ぎした人の送金で建てられた瀟洒な家屋も点在している。14日、串本町の「潮風の休憩所」内の歴史展示を観察した。歴史展示は、オーストラリアの木曜島などに真珠ダイバーとして出稼ぎに行った和歌山県人に焦点をおいている。後、同町の高松寺を訪問し、オーストラリアで遭難したナマコ漁船乗員らの供養碑を観察した。

### (4) 宮城県気仙沼市の漁業の変遷とインドネシア人技能実習生に関する調査

調査者：長津一史

期 間：1月9日～11日、3月26～28日、6月26日～29日

出張先：宮城県気仙沼市

概要：

1. プロジェクトの紹介

2016年は、1月、3月、6月、8月に宮城県気仙沼市の漁業の変遷とインドネシア人技能実習生に関する調査をおこなった。以下は、これらの調査のまとめである。

【1月】1月10日、気仙沼市役所市民ホールにてインドネシア人技能実習生（水産加工、女性）が出席する成人式の観察調査をおこなった。成人式には4人のインドネシア人実習生（すべてジャワ人）が参加した。後、市内のショッピングセンター・イオンにおいて、インドネシア人技能実習生の休日の過ごし方に関する聞き取り調査をおこなった。休日のイオンには、市内で就労する技能実習生のほか、日本各地を拠点とする停泊中の漁船で働く技能実習生も集まる。そうした漁業の技能実習生（男性）5人からも話をきいた。後、市内水産加工会社の社員寮において、インドネシア人実習生8人を対象に聞き取り調査をおこなった。

11日、上記の実習生8人との聞き取りを継続した。8人のインドネシア人実習生の民族属性は、ジャワ人が5人、スンダ人が2人、ミナンカバウ人が1人であった。年齢は19歳～23歳。ミナンカバウ人がスマトラ島パダン出身である他は、すべてジャワ島出身。いずれもSMK（Sekolah Menengah Kejuruan, 高等専門学校）を修了後、教師の紹介で日本での技能実習職を行うことになった。生活面で大きな問題はないが礼拝所の不備を問題視していた。気仙沼市内にはまだ礼拝所はない。聞き取り対象者は次のとおり。

1. Iip 24歳、ジャワ人、第一期生、2013年6月始業
2. Kaisa, 22歳、ジャワ人、第一期生、2013年6月始業
3. Azizah, 22歳、スンダ人、第一期生、2013年6月始業
4. Aina, 22歳、スンダ人、第一期生、2013年6月始業
5. Lissuka, 22歳、ジャワ人、第三期生、2014年9月始業
6. Irma, 21歳、ジャワ人、第三期生、2014年9月始業
7. Winda, 20歳、ジャワ人、第三期生、2014年9月始業
8. Nila 23歳、ミナンカバウ人、第四期生、2015年9月始業

【3月】3月26日、気仙沼インドネシア・パレード組織委員代表の鈴木敦夫氏および、阿部長商店の外国人社員担当の菊田政則氏とインドネシア人技能研修生の調査に関する打合せをおこなった。27日鈴木敦雄氏とともに、阿部長商店インドネシア人研修生寮において、2014年9月に来日した研修生4人から話を聞いた。後、市内介護施設キングスガーデンにおいて、フィリピン人介護士から労働状況について話を聞いた。

28日、唐桑半島東舞根のNPO法人「森は海の恋人」を訪問し、副理事の畠山信氏と「水産物認証とグローバル化」に関する話し合いをおこなった。再び市内の阿部長商店に移動、上記菊田氏とともに市内サンマ加工工場にて作業工程を観察するとともに、インドネシア人技能研修生の就労状況を視察した。なお、本調査にはインドネシア国立ハサヌディン大学教授・総合地球環境学研究所客員教授のAgnes, Dorotea Rampisela氏も同行した。

【6月】6月26日、気仙沼において鈴木敦雄氏（気仙沼インドネシアパレード組織委員）、佐藤重光氏（インドネシア人研修生の世話人）、ムハマド・ヌルソレ（インドネシア人研修生、以下同）氏、サイフル氏、ヘル氏、カルニラ氏、ヌルマワティ氏、リリス氏、リサ氏とともに復興屋台村気仙沼横町で食事をとりながら調査打合せをおこなった。後、阿部長商店、菅原工業それぞれのインドネシア人研修生宿舎を訪問し、実習生の日常生活のあり方、交友関係等について話を聞いた。

27日、気仙沼市漁業協同組合にて資料収集、魚市場見学、インドネシア人研修生が乗船する三重県籍のカツオ漁船内を見学。後、唐桑町のNPO法人「森は海の恋人」を訪問、副理事の畠山信氏に唐桑湾の海面養殖地帯を船で案内してもらい、あわせてカキ生産・流通のグローバル化について



話を聞いた。

28日、鈴木氏の案内により、唐桑町鮪立の元マグロ船主古館家を訪問した。当家の主人、鈴木伸太郎氏から唐桑半島の海洋ネットワーク、マグロ漁の歴史、操業のグローバル化について話を伺った。

【8月】8月6日、仙台にてレンタカーを借りて気仙沼に向かった。途中、唐桑半島の水源森林地帯、室根山頂上近くにある牡蠣養殖業者の植林地、唐桑舞根漁民がお塩奉納をする室根神社を観察した。気仙沼では、鈴木敦雄氏（気仙沼インドネシアパレード組織委員）と佐藤重光氏（インドネシア人研修生の世話人）と会い、翌日のインドネシア・パレードのプログラム、参加者状況について伺った。後、市内プラザホテルにて、気仙沼市商工会議所青年部の懇親会に参加し、青年部長ほか市内事業者か外国人技能実習生の雇用状況について話を聞いた。

7日、インドネシア人技能実習生、青年部メンバーらとともに、インドネシア・パレードを参与観察した。同パレードは、「気仙沼みなとまつり」の一環としておこなわれている。3時頃から、佐藤氏、鈴木氏、石渡久師氏（青年部メンバー）、北村由美氏（京都大学准教授）、ムハマト・ヌルソレ氏（インドネシア人研修生、以下同）、リフキ・ムバラク氏、ヘル氏、アリ・ウスマン氏、リンドゥアジ氏とともに復興屋台村気仙沼横町でインドネシア・パレードと技能実習生との関わり等に関する聞き取りをおこなった。

8日、気仙沼市魚市場見学において鮫、マグロ、カツオの水揚げを観察した。宮城県日南市船籍のカツオ漁船からは、気仙沼沖でのカツオ漁操業について話を聞いた。後、阿部長商店の水産加工工場（技能実習生の職場）において工場長から実習生の仕事内容について聞き取りをおこなった。午後、唐桑町鮪立に移動し、元マグロ船主古館家を訪問し、マグロ漁船、魚付林、資源保護等に関して話を伺った。後、「森は海の恋人」を訪問、畠山信氏からフィリピン・ネグロスでの養殖支援について話を聞いた。また、12月に予定されているインドネシア・東ジャワ州シダルジョのエビ養殖の合同調査について打合せをおこなった。

#### (5) インドネシア人類学会国際シンポジウムへの参加・同学会での報告

調査者：長津一史

期 間：7月27日～29日

出張先：インドネシア・ジャカルタ

概 要：

第6回インドネシア人類学会国際シンポジウム（International Symposium of Journal Antropologi Indonesia）のパネルProblematizing Inequality and Inclusiveness of the “Masyarakat Adat”：The Power-Knowledge Nexus（Herry Yogaswara, Riwanto Tirtosudarmo & Fadjat I. Thufail）に参加し、Bajau as Maritime Creoles：Dynamic of the Ethnogenesis in Southeast Asian Maritime Worldのタイトルで報告した。

#### (6) マカッサル・ハサヌディン大学において調査報告および今後の調査の打合せ

調査者：長津一史

期 間：10月29日～11月1日

出張先：インドネシア・マカッサル

概 要：

インドネシア国立ハサヌディン大学において、Andi Amri国際交流センター講師、Agnes, Dorotea Rampisela農学部教授、伊藤眞首都大学東京名誉教授、遅沢克也愛媛大学農学部教授（JICA

専門研究者)と面会し、東南アジア海域の境域世界と民族の再編に関するこれまでの調査概要の報告をおこない、また今後の合同調査について話し合った。

1.  
プロジェクトの紹介

#### (7) 日韓跨境行商人に関する調査

調査者：井出弘毅

期 間：2015年11月10日～13日

出張先：下関市、韓国・釜山広域市調査

概 要：後掲の井出報告を参照

#### (8) 在日コリアン寺院に関する調査

調査者：宮下良子

期 間：①2016年10月7日～10日、②10月14日～16日

出張先：①韓国金浦市、ソウル市、②大阪市生野区コリアタウン

概 要：

韓国調査についてのみ記す。今回のソウル調査は、アジア文化研究所プロジェクトの「グローバル化時代の境域社会における民族再編のダイナミクス——東南アジア・東アジアの地域間比較」研究の最終年度にあたる。本プロジェクトの初年度には、在日コリアン寺院の宝厳寺の住職が韓国仏教太古宗の仏教寺院で禅の教義を伝授するという提案のための訪問に同行した(報告済み)。その調査時に宝厳寺の住職に紹介された曹溪宗僧侶の一人が、金浦市龍華寺の住職であったことから、今回の調査を計画した。それは、仏教寺院がその理念のもと、医療施設を敷地内に併設し、運営しているという事実に着目したからである。

報告者の渡航1週間前に、キーパーソンである龍華寺の元住職が寺を辞し、台湾に滞在していることを知り、今回の調査は実現できないと思われたが、在日コリアン寺院の弥陀寺住職の紹介で、韓国曹溪宗の尼僧の慧棹(ヘド)スニムの協力を得ることができた。以下、調査日程に従い、時系列にまとめたみたい。

10月7日(金) 羽田空港を経て金浦空港に到着。空港に待ち合わせをしていたヘドスニムの運転で宿泊先ホテルのホテルラール金浦に向かい、そこで打合せを行った。

10月8日(土) ヘドスニムは別件があり、彼女のアドバイスで、一人で午前からソウル市内の津寛寺で8日、9日の2日間に実施される8日の方の水陸祭に参加する。ホテルからタクシーで曹溪宗津寛寺へ向かい、ヘドスニムが勤務する大学の同僚である、金氏に会うことができたので、彼に同行し、行事や寺の説明を伺うことが出来た。午後5時に行事が終了。

10月9日(日) 宿泊ホテルから、ヘドスニムと龍華寺へ向かう。まず、龍華寺敷地内のボリス(菩提樹)療養病院で常任理事の孫氏に聞き取り調査を行い、その後、龍華寺の現住職である凡愚住職に同じく聞き取り調査を行った。そして、病院職員の案内で院内の病棟を巡検する。ヘドスニムは別件があり、そこで報告者と別れ、報告者は引き続き、一人で龍華寺を巡検する。龍華寺はもともと漢江周辺の商人、民間人が発足した寺ということで、漢江を見渡せる位置に本堂の弥勒菩薩が立っている。

10月10日(月) 午前中は、ヘドスニムや金氏と電話での打ち合わせを行い、午後から、金浦空港近くのSRホテルソウルへ移動する。金浦の宿泊施設は龍華寺の最寄りのホテルということで予約したが、交通の便が悪く、翌日の帰国のフライトが早朝であり、アクシデントを防ぐためだ。到着後、近辺を巡検する。

10月11日(火) 午前7時にホテルをチェックアウトし、金浦空港9時発のフライトで羽田空港に

帰着する。

今回の韓国調査は龍華寺の元住職の突然の離職に伴い、調査の実施が危ぶまれたが、周りの関係者のご厚意によって、無事遂行することができた。ボリス療養病院は「家庭医学科」、「神経科」、「一般医科」、「漢方」という外科的処置を施さない治療に特化した病院であり、ターミナルケアの印象が強い。宗教、特に仏教寺院が医療と連携することで広がる可能性を提示するモデルケースとして、本事例は興味深い。また、日本が抱える高齢者医療の課題にも多くの示唆を与える事例であるといえよう。

### (9) フィリピン南部の少数民族の権利保護に関する調査

調査者：石井正子

期 間：2016年10月27日～11月1日

出張先：フィリピン・マニラおよびサンボアング

概 要：

マニラにおいては、フィリピン国立大学で資料収集を行うとともに、フィリピン南部の和平プロセスに詳しいSoliman Santos弁護士に、フィリピン政府とモロ民族解放戦線とのあいだに交わされた二つの和平合意、ムスリム・ミンダナオ自治地域設立に関する組織法、および1987年憲法における少数民族に対する呼称の変遷について質問を行い、参考資料の提示を受けた。

サンボアング市においては、スル州初の国会議員となったオンブラ・アミルバンサの妹のモネラ・アミルバンサ氏にのべ11時間にわたるインタビューを行い、彼女のライフヒストリーに浮かび上がるオンブラ・アミルバンサやスル・スルタネイトの末裔、歴代のフィリピン大統領や議員に関わる話を聞き、記録を行った。

## 研究の成果

### 【論文】

1. Nagatsu, Kazufumi. 2015. Social Space of Sea Peoples : A Study on Arts of Syncretism and Symbiosis in Southeast Asian Maritime World. *The Journal of Sophia Asian Studies* 33 : 111-140.
2. 甲斐田万智子・佐竹真明・長津一史・幡谷則子（編）2016『小さな民のグローバル学——共生の思想と実践をもとめて』上智大学出版会.
3. 長津一史. 2016.「海民の社会空間——東南アジアにみる混淆と共生のかたち」『小さな民のグローバル学——共生の思想と実践をもとめて』甲斐田万智子・佐竹真明・長津一史・幡谷則子（編），280-305ページ. 上智大学出版会.
4. 長津一史2017.「境域」『＜シリーズ 東南アジア地域研究＞政治』山本信人（編）印刷中. 慶應義塾大学出版会.
5. Nagatsu, Kazufumi 2017. Maritime Diaspora and Creolization : A Genealogy of the Sama-Bajau in Insular Southeast Asia. *Senri Ethnological Studies* (in press) .
6. 宮下良子. 2015.「接続するローカリティ／トランスナショナリティ——『在日コリアン寺院』の信者の語りを中心として」『慶應義塾大学東アジア研究叢書 東アジア海域文化の生成と展開——＜東方地中海＞としての理解』東京：風響社，pp. 633-668.
7. 宮下良子. 2015.「『朝鮮寺』から『在日コリアン寺院』へーコロニアル／ポストコロニアル状況における在日コリアンの宗教的实践」『人文学報』106：49-53.



【口頭発表】

1. Nagatsu, Kazufumi. 2015. "The Making of 'Pious Bajau': Two Cases of Islamization at Margin in Malaysia and Indonesia," presented in a panel "Ethnic Re/formation at Margins : Negotiations with Global Institutions, NGOs and Missionaries in Insular Southeast Asia," at the 1st Biennial Conference of the Consortium for Southeast Asian Studies in Asia (SEASIA), December 12, 2015, Kyoto International Conference Center.
2. 長津一史. 2016a. 「東南アジア海民論と二つの比較——地域研究的越境の試みとして」 パネル「Beyond Boundaries—〈比較〉で考える, 〈比較〉を考える」(代表: 加藤剛) 『東南アジア学会第95回研究大会』2016年6月5日, 大阪大学豊中キャンパス
3. Nagatsu, Kazufumi. 2016b. "Bajau as Maritime Creoles : Dynamic of the Ethnogenesis in Southeast Asian Maritime World," presented at Panel "Problematizing Inequality and Inclusiveness of the "Masyarakat Adat" : The Power-Knowledge Nexus," (Herry Yogaswara, Riwanto Tirtosudarmo & Fadjar I. Thufail), the 6th International Symposium of Journal Antropologi Indonesia, July 28, 2016, National University of Indonesia.
4. Ishii, Masako. 2015. "Who are the Bangsamoro People? Reconstructing the Notion of Bangsamoro in the Peace Process between the Philippine Government and the Moro Islamic Liberation Front," presented in a panel "Ethnic Re/formation at Margins : Negotiations with Global Institutions, NGOs and Missionaries in Insular Southeast Asia," at the 1st Biennial Conference of the Consortium for Southeast Asian Studies in Asia (SEASIA), December 12, 2015, Kyoto International Conference Center.

【調査に関連する写真（撮影はすべて長津）】



写真1 粗放型エビ養殖池（インドネシア・東ジャワ州シドアルジョ）

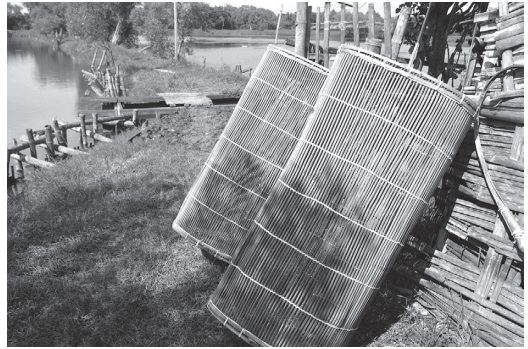


写真2 粗放型エビ養殖池で収穫時に使われる漁具（シドアルジョ）



写真3 鯨骨鳥居 (和歌山県太地町)



写真4 鯨の供養碑(和歌山県太地町東明寺境内)



写真5 和歌山県太地町の町並み



写真6 和歌山県太地町の町並み



写真7 宮城県気仙沼市のインドネシア・パレード



写真8 インドネシア・パレードに参加するインドネシア人技能実習生



1. プロジェクトの紹介



写真9 宮城県気仙沼市の魚市場。サメが水揚げされたところ



写真10 宮城県気仙沼市に寄港したカツオ漁船で働くインドネシア人技能実習生



写真11 宮城県気仙沼市唐桑町鮭立の鈴木（古館）家。当主はマグロ漁船の元船主。



写真12 鈴木（古館）家当主の伸太郎氏夫妻